

主要展示品解説

1 聖観音坐像 (千姫観音) (出品番号 15)

三重・柴原家蔵

徳川家康の孫娘で、豊臣秀頼の正妻となった千姫ゆかりの仏像。「千姫観音」と呼ばれている。大坂夏の陣における落城のさい、千姫は豊臣家のはからいで城を出され、父秀忠の本陣まで送られた。

翌年、千姫は本多忠刻に再嫁して伊勢桑名、のち播磨姫路へ移ったが、その後どうしたことか、子供ができては育たない。伊勢・慶光院の周清上人に占ってもらったところ、秀頼の祟りということだった。

そこで秀頼の怨念を鎮める周清尼の願文とともに、秀頼自筆の「南無阿弥陀仏」名号を神体としてこの観音像の胎内に納め、末永く慶光院でまつることになったのである。



2 ^{いしやまかつせんえでん}石山合戦絵伝 (出品番号 28)

大阪城天守閣蔵

織田信長と大坂（石山）本願寺が戦った石山合戦の様子を描いたもので、場面は下から上へ展開する。最も下の段は各地の門徒が本願寺へ集結し、法主・顕如を囲んで信長対策を講じている場面。二段目は天満に置かれた信長の陣所が本願寺の計略により水攻めにあっている場面。三段目は伊勢国において門徒たちが信長軍へ夜討ちをかけている場面。四段目は劣勢の信長軍が退陣を検討している場面。そして最も上の段は、兵糧の確保をめぐり信長軍と河内国の門徒が衝突した場面である。

幕末ごろの成立と推定され、絵は大坂で刊行された『絵本拾遺信長記』の挿絵をアレンジしたもの。浄土真宗の寺で、宗派最大の法難における門徒たちの誇り高き戦いを語り聞かせるために使われたのだろう。



3 金札段替二枚胴具足 (出品番号 55)

大阪城天守閣蔵

高台院 (おね) の甥で備中足守藩主となった木下利房の所用と伝える具足。彼が建立した京都・高台寺塔頭圓徳院に同型のものが伝存する。

兜には鉄鑄地の三日月形の前立と、金の御幣の後立が附属する。幣は元来神にささげる布などの供物を指す。これらを木や竹の串に挟んで供えたのが変化し、紙垂という紙を挟んで社殿に置いたものを御幣というようになった。金の御幣を武具の意匠に用いた例として、これを馬駿にした柴田勝家が知られる。



4 増田長盛・石田三成連署血判起請文 文禄4年7月12日付（出品番号64）

大阪城天守閣蔵

文禄4年（1595）7月12日付で豊臣家の奉行2名が作成した血判起請文（神仏の名を挙げ、自分の血を滴らせて誓約する文書）である。4日前の7月8日に関白豊臣秀次が高野山に追放され、3日後の15日には切腹するという緊迫した状況下でしたためられたものである。

その内容は秀吉・秀頼父子に忠誠を尽くす、秀吉の定めた法度を遵守するといったもので、後ろに継いである神文（独特の印を押した熊野牛玉紙の裏面に神仏の名を記し血判した部分）は、1300文字以上に及ぶ長大なものである。秀次事件を機に、同様の形式と内容を持つ起請文が豊臣家に従う諸大名によって提出されており、本状はそうした一連の起請文群の起点といえる。

（釈文）

敬白 天罰霊社上巻起請文前書事

- 一、御ひろい様へたいし奉り聊不存表裏」別心、御為可然様ニもりたてまつる」へき事
- 一、諸事 大閤様御法度御置目之通、」無相違可相守事
- 一、御ひろい様之儀、疎略を存、并太閤様」御置目を相背族在之者、縦縁者」親類知音たりといふ共、ひいきへんは」なく糺明之上を以成敗之儀可申付事
- 一、我等自然無分別之儀於有之ハ、御」置目をも被仰付衆異見をうけ、」多分ニ付而可相濟事
- 一、太閤様御恩深重ニ蒙り申候間、面々」一世之中ハ不及申上、子々孫々までも」申伝、公儀御為おろかに不存、」無ニニ可奉尽忠功事

右條々若私曲偽御座候ニおみてハ、」此霊社上巻起請文御罰を深厚ニ」罷蒙、今生にてハ白癩・黒癩之」重病を請、弓矢冥加七代尽、於」来世ハ、阿鼻無間地獄ニ墮在シ、未」来永功浮事不可有之者也、仍」上巻起請文如件

（起請文言省略）

文禄四年乙未七月十二日 増田右衛門尉

長盛（血判・花押）

石田治部少輔

三成（血判・花押）



5 洛中洛外図屏風 (出品番号 80)

京都・林家蔵

洛中洛外図屏風は、京の市中と郊外の名所・風俗を描いた屏風絵で、室町時代後期の様子を描写したものを「初期（第1定型）洛中洛外図屏風」と呼ぶのに対し、江戸時代初期の景観を描いたものを「第2定型洛中洛外図屏風」と呼び慣らわしている。この「第2定型」はさらにいくつかのグループに分類可能で、本品はそれらの内、一つのグループの代表作品に位置付けられ、概ね元和元年（1615）～3年頃の景観を示すと考えられている。

右隻は左上方から右下方へと鴨川が流れ、2・3扇に大仏殿（方広寺）、その右上方に豊国社、3～6扇の鴨川下方に祇園祭の山鉦巡行、六扇に内裏を描く。

左隻は2～4扇に二条城を描き、右上端の鞍馬から左上端の嵐山・淀までを収める。

秀吉を祀る豊国社、豊臣家の菩提寺でもあった大仏殿が建つ京都・東山の阿弥陀峯の麓一帯は、夭逝した秀吉の長子鶴松（棄丸）の菩提寺祥雲寺も建てられるなど、豊臣家の「聖地」となっていた。



(右隻)



(左隻)